

# エラノス会議におけるユダヤ・ルネサンスと 分析心理学の展開

奥山史亮

(和文要旨)

エラノス会議は、諸学問の研究者が集って宗教の根源的一体性、すなわち「聖なるもの」を「治療」の領域において復興しようとした学際的会議として知られている。一般的には分析心理学の理論展開の場とみなされる傾向にあるが、1930年代から戦後直後に至るエラノス会議には、シオニズムを掲げたマルティン・ブーバーやゲルショム・ショーレム、エーリッヒ・ノイマン、ファシズムに接近したユングやミルチャ・エリアーデ等がそれぞれの人種心理論を交錯させながら、既成宗教に代わる新たな「宗教」の役割を論じた場所でもあった。エラノス会議とは、各参加者のうちにおいて尖鋭化した民族復興意識と宗教的刷新の欲望が混交し、形成された場所であったと考えられないか。

本稿ではとりわけ、ユング派の分析家であり、シオニストでもあったエーリッヒ・ノイマンのユダヤ性をめぐる議論に着目する。ノイマンは、ユングが「精神療法一般医師協会」において、反ユダヤ的と批判されることになる文書を発表した際、その真意を問う手紙を送り、議論を展開した。これら書簡資料の分析から、ユング派的治療、ユダヤ性、宗教学的概念の交差を抽出し、宗教研究と民族主義的言論、倫理性をめぐる議論につなげたい。

キーワード

分析心理学 ナショナリズム、シオニズム、ファシズム

(SUMMARY)

Eranos is known as an interdisciplinary conference where academic researchers gathered to revive the fundamental unity of religion in the area of "treatment". Generally, it tends to be regarded as a topos for theoretical development of analytical psychology, but at the Eranos from the 1930s to the postwar period, Jung, who approached fascism, and Zionist such as Erich Neumann discussed the role of a new "religion" with their respective theories of ethnic issues. It could be considered that the Eranos was topos where each

participant discussed the role of religion, based on their nationalism and the desire for religious renewal.

This paper focuses on Jung and Neumann's debate over the Jewishness and fascism. When Jung published documents that would be criticized as anti-Semitic at the "Allgemeine Ärztliche Gesellschaft für Psychotherapie", Neumann sent Jung letters asking his intention. In his paper, we consider the intersection of Jungian treatment, Jewishness, and religious concepts, by analyzing these letter materials.

#### Keywords

Analytische Psychologie, Nationalism, Zionism, Fascism

### 1. はじめに：問題の所在

本稿では、エラノス会議において近代ユダヤ運動とファシズムについて交わされた議論を整理することにより、民族主義宗教運動、宗教研究、および精神療法が交差した場所としてエラノス会議を捉えなおすことを目的とする<sup>1</sup>。オルガ・フレーベ＝カプティンとカール・グスタフ・ユングが中心となり 1933 年に創設したエラノス会議は、一般的には、諸学問領域の研究者が集って宗教の根源的一体性、すなわち「聖なるもの」を「治療」の領域において復興しようとした学際的営みとして捉えられてきた。すなわち、エラノス参加者たちは、ヌミノースや元型、集合的無意識といった分析心理学の概念を共有し、種としての人類が有する普遍的な深層心理を把握することにより、東西の宗教間対話、文化間交流、他者共存的な心理療法を実践してきたと考えられる傾向にある。エラノス会議がそのような側面を有していたことは確かに否定できない。しかし 1930 年代から戦後直後に至るエラノス会議には、シオニズムを掲げたマルティン・ブーバーやゲルショム・ショーレム、エーリッヒ・ノイマン、ファシズムに接近したユングやミルチャ・エリアーデ等がそれぞれの人種心理論を交錯させながら、既成宗教に代わる新たな「宗教」の役割を論じた場所でもあった。エラノス会議とは、各参加者のうちにおいて尖鋭化した民族復興意識と宗教的刷新の欲望が混交し、形成された場所であったと考えられないか。

19 世紀末以降の民族主義宗教運動では、周知のように、諸宗教の背後に単数的「宗教」

---

<sup>1</sup> エラノス会議の通史に関しては以下を参照。Steven W. Wassestrom, *Religion after religion. Gershom Sholem, Mircea Eliade and Henry Corbin at Eranos*, Princeton University Press, 1999. Hans Thomas Hakl, *Eranos: An Alternative Intellectual History of the Twentieth Century*, Routledge, 2013. 井筒俊彦『東洋哲学の構造 エラノス会議講演集』澤井義次監訳、慶應義塾大学出版会、2019年。ウィリアム・マガイアー『ボーリングゲン 過去を集める冒険』高山宏訳、白水社、2017年。

を原初的なものとして措定し、それを人間精神の本来的なものとして回復させようとする試みが教会の刷新や宗教間対話というかたちで行なわれてきた<sup>2</sup>。さらにドレフュス事件などによって西欧社会へのユダヤ人の「同化」が挫折したことを受けて、ブーバーが「ユダヤ・ルネサンス」と呼んだような、「原初的なユダヤ性」を復興させようとする近代ユダヤ運動が、民族主義宗教運動と交差しながら展開してきたことも周知のとおりである。そこでは、ヘブライ語聖書のドイツ語訳、レールハウス（ユダヤ学院）の設立運営、東方ユダヤ文化の受容といったことなどが、西欧社会の枯渇したユダヤ性を再生させるため、あるいは同化ユダヤ人たちをユダヤの原初に立ち戻らせるために行なわれた。

分析心理学を創始したといわれるユングも、これら民族主義宗教運動の潮流の中でその思想を形成したと考えられている<sup>3</sup>。1912年にフロイトから離反した後、ユングは民族主義神秘思想的文献の出版人オイゲン・ディーデリスクやヘルマン・カイザーリングの「智恵の学園」に関わるようになり、そこでヴィルヘルム・ハウアーやブーバーの知遇を得ることになった。のちにナチズムを支持することになるインド学者であるハウアーはドイツ信仰運動を主導しながらインド・アリアの原宗教を学的対象として捉えようとしていた<sup>4</sup>。ユングはハウアーやブーバーを講演者としてチューリヒの心理学クラブに招待し、1933年以降はエラノス会議での講演も依頼するようになった。戦間期における民族主義宗教運動に関するユングの言論をたどっていくと、エラノス会議は民族の原初的な古層を近代の内に復興させようとした知的潮流の内において形成された場であった可能性が想定される。

本稿ではとりわけ、シオニズムとファシズムが交差した場所としてのエラノス会議の特性を把握するために、ユング派の分析家であると同時にシオニストでもあり、『グレート・

---

<sup>2</sup> ジョージ・L・モッセ『国民の大衆化』佐藤卓己、佐藤八寿子訳、筑摩書房、2021年。上山安敏『宗教と科学 ユダヤ教とキリスト教の間』岩波書店、2005年などを参照。

<sup>3</sup> リチャード・ノル『ユング・カルト カリスマ的運動の起源』月森左知、高田有現訳、創土社、2011年、および『ユングという神 秘められた生と教義』老松克博訳、新曜社、1999年などを参照。

<sup>4</sup> ヴィルヘルム・ハウアーのドイツ信仰運動とその歴史的コンテクストについては、以下を参照。深澤英隆『啓蒙と霊性 近代宗教言説の生成と変容』岩波書店、2006年、とりわけ第Ⅲ部「生・民族・自然——内在的宗教性」。久保田浩「近代ドイツにおける「宗教」の含意—民族主義的宗教運動の公認「宗教」へ向けての闘争を事例として」『宗教研究』324号、1-24頁、「宗教学からネオナチ出版会へ 「ヨーロッパ宗教史」を語る「宗教学」と「極右」」竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』水声社、2010年、253-282頁。ジョージ・L・モッセ『フェルキッシュ革命—ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』植村和秀他訳、柏書房、1998年。平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』北海道大学出版会、2020年。The Study of Religion under the Impact of Fascism, ed. by Horst Junginger, Brill, Leiden and Boston, 2008. Jung's Seminar on Nietzsche's Zarathustra, Edited and Abridged by James L. Jarrett, Princeton University Press, 1998.

マザー』『意識の起源史』の著者であり、エラノスの常連として知られるエーリッヒ・ノイマンに着目する。ノイマンとユングの関係性を整理することにより、両者が「シャドー（影）の意識化」という分析心理学の理論を民族的使命として構築していった過程を明らかにし、エラノス会議の成立した歴史的コンテクストに迫りたい。

## 2. ユングとノイマンの往復書簡

まずユングとノイマンの往復書簡<sup>5</sup>を資料としながら、両者の関係性を整理する。1905年にベルリン・シャルロッテンベルグの中産階級家庭に生まれたノイマンは、エアランゲン＝ニュルンベルクやベルリン・フンボルト大学で医学を修めた。大学在学時にはカフカに関する論説を執筆したり、ブーバーと接触を持ったりしたほか、ベルリンのシオニスト連合（Berliner Zionistische Vereinigung）に加入してシオニズムにかかわるようになり、ハンナ・アーレントやハンス・ヨナスといったユダヤ知識人と交遊をもった<sup>6</sup>。

1933年6-7月のベルリンで開催されたユングの講演「近代ユダヤ人の魂の問題（“Seelenproblem des modernen Juden: Eine Reihenanalyse von Träumen, Bildern und Phantasien”）」に参加したことを契機としてノイマンは、臨床医として分析心理学を専門にすることを決意したという<sup>7</sup>。さらにナチスの台頭により、「職業官吏再建法」「アーリア人条項」などが施行されていったことを受け、ノイマンはパレスチナへの移住を決めて、その途中チューリヒに立ち寄り、ユングから分析を受けることを計画した。公開されているユングとノイマンの最初の書簡は、同年9月11日付のノイマン宛書簡であり、10月3日午後4時の診療予約を受け付けたことを確認するものである<sup>8</sup>。ノイマンはチューリヒに1934年5月まで滞在

<sup>5</sup> C. G. Jung, *Erich Neumann: Die Briefe 1933-1959, Analytische Psychologie im Exil*, Herausgegeben von Martin Liebscher, EDITION C. G. Jung, 2015. 本書の英語訳 *Analytical Psychology in Exile: The Correspondence of C. G. Jung and Erich Neumann*, Princeton University Press, 2015 も参照。ユングとノイマンの関係性に関する本稿の分析は、以下の研究を参照している。Micha Neumann, *The Relationship between C. G. Jung and Erich Neumann. Based on their Correspondence*, Chiron Publications, Asheville, North Carolina, 2015. Heather McCartney, “Introduction” xi-lxi, *Analytical Psychology in Exile*, 2015. *Turbulent Times, Creative Minds. Erich Neumann and C. G. Jung in relationship (1933-1960)*, Edited by Erel Shalit and Murray Stein, Chiron Publications, Asheville, North Carolina, 2016. Angelica Löwe, *Life and work of Erich Neumann: On the side of the inner voice*, Translated by Mark Kyburz, Routledge, 2020.

<sup>6</sup> 後年、ノイマンの訃報を受けたアーレントは学生時代における彼との交遊を日記に綴り、ショーレム宛ての手紙にも「エーリッヒ・ノイマンの死にはとても驚きました。私は彼を若いころからよく知っていました」（『アーレント＝ショーレム往復書簡』マリー・ルイーズ・クノット編、細見和之他訳、岩波書店、2019年、364頁）と記している。

<sup>7</sup> Heather McCartney, 2015.

<sup>8</sup> C. G. Jung, *Erich Neumann: Die Briefe*, 2015, s. 69.

し、分析心理学の訓練を受けている。同年1月29日付のユングのノイマン宛書簡には、患者を分析し、臨床での実践を積むようにとのユングの助言が記されている<sup>9</sup>。

両者が交わした3通目の書簡は、日付が記されておらず正確な作成日は不明であるが、ノイマンが同年2月下旬から5月までチューリヒに滞在しているあいだに作成したものと考えられる。その冒頭には、ユングが執筆した「精神療法の現状について (“Zur gegenwärtigen Lage der Psychotherapie”）」の原稿をアントニア（トニー）・ヴォルフから受け取り、ユダヤ人に関する甚だしい誤解が数多く見受けられることに衝撃を受けたこと、このユングの原稿を批判した分析家グスタフ・バリイの書評論文についてトニー・ヴォルフと議論したことが記されている<sup>10</sup>。「精神療法の現状について」は、ユングが反ユダヤ主義と批判されるに至った契機となった論文であるが、まずその執筆された背景<sup>11</sup>を確認したのち、ユダヤ性をめぐるノイマンとユングの議論を分析する。

フロイトがナチスの台頭によりその活動を制約されはじめたのとは対照的に、ユングは1933年3月にエルンスト・クレッチマーの後任として「精神療法一般医師協会 (Allgemeine Ärztliche Gesellschaft für Psychotherapie)」の会長、およびその機関誌『精神療法とその境界領域中央雑誌 (Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete)』（以下『中央雑誌』と表記)の編集委員に就任した。これは精神療法の活動のための国際的な協会であり、各国それぞれの支部協会から構成されていたが、そのドイツ支部協会はナチス台頭以降、マティアス H. ゲーリング (ヘルマン・ゲーリングの従兄弟) の管轄となっていた。『中央雑誌』1933年12月号のドイツ支部向けの付録冊子には、国民社会主義の原理に忠誠を誓うことを精神療法家に命じる M. H. ゲーリングの宣言文が掲載された。

クレッチマーの退任がナチスから強制された結果であったこともあり、ユングがこのようなゲーリングの宣言文の掲載を許可したことは、ナチズムに追随したことに同義であると批判されるに至った。それに対してユングは、ゲーリングの宣言を支持したことはなく、精神療法家たちが政治上中立的に活動できる「超国家的協会 (Überstaatliche Gesellschaft)」

---

<sup>9</sup> *Ibid.*, ss. 69-70.

<sup>10</sup> *Ibid.*, ss. 70-76.

<sup>11</sup> 反ユダヤ主義とユングの関係性については以下を参照。ゲルハルト・ヴェーア『ユング伝』村本詔司訳、創元社、1994年、253-273頁。アンリ・エレンベルガー『無意識の発見下』木村敏、中井久夫監訳、1999年、弘文堂。Volodymyr Walter Odajnyk, *Jung and Politics. The Political and Social Ideas of C. G. Jung*. Foreword by Marie-Louise von Franz, Authors Choice Press, 1976 (2007). Geoffrey Cocks, *Psychotherapy in the Third Reich, The Göring Institute Second Edition, Revised and Expanded*, Transaction Publishers, 1997. Carrie B. Dohe, *Jung's Wandering Archetype. Race and Religion in analytical psychology*, Routledge, 2016. Heather McCartney, 2015. バーバラ・ハナー『評伝 ユング II』はユング派分析家の見地から上記の経緯を説明している。

を創設して、ユダヤ人の同僚をナチズムから守ろうとしていることを主張した。ユングの私設秘書を務めたユダヤ人分析家アニエラ・ヤッフエは、ナチスの危険性に対するユングの認識が甘かったことを認めながらも、この主張を全面的に支持している<sup>12</sup>。しかしユングは、『中央雑誌』1934年5月に論文「精神療法の現状について」を掲載したことによって、さらに反ユダヤ主義という批判を受けることになった。

本論文は、生育環境および居住地域が心理の形成に及ぼす影響を分析し、ユダヤ人と非ユダヤ人、とりわけ「アーリア人」との心理的性質の相違を論じたものである。それによれば、放浪的なユダヤ人は特定の土地との安定した結びつきを持っていないために、有益な文化を創出する能力に欠けるといふ。さらにユングは、精神療法に携わる分析家は、自らの心理におけるシャドー（影）を意識化する必要があるにもかかわらず、フロイトやアドラーをはじめとするユダヤ人の分析家は非ユダヤ人に対する非自覚的な憤りや劣等感情といったシャドーに無自覚であり、意識化が不完全であるという批判を展開した。

ユダヤ人の分析家たちは、当然のことながら、このユングの論文に対して多くの批判を寄せた。まずユングの同僚であり友人でもあった分析家ジェイムズ・キルシュは、ユダヤ人が離散的であるがゆえに有益な文化を生み出す力をもたないというユングの主張は、近年パレスチナでのユダヤ人の活動を想起すれば誤りであることは明瞭だと訴えた<sup>13</sup>。さらにキルシュは、ユングはフロイトをユダヤ人の典型として想定しているが、それはユダヤ人の多様性を捉え損なう甚だしい無理解であるとも主張している。

次にスイス生まれの精神分析医であるグスタフ・バリーがユングとキルシュを批判する論評を発表した。バリーは、ユングがユダヤ人の多様性を捉えそこなっていると訴えるキルシュの論評は批判として不徹底であり、ナチスに反対して会長職を辞したクレッチマーの後任にユングが就いたこと、さらにヒトラーに対する「信義の誓い *Treuegelöbnis*」を掲載したことは、ユングが反ユダヤ主義へ転換したことに他ならないと糾弾した<sup>14</sup>。

ユングはバリーの批判に対して、既述のように会長への就任は精神療法をナチズムから防衛するための手段であると応じ、ユダヤ人と非ユダヤ人の心理的性質の差異に関する分析はナチズムの台頭以前から着手してきた人種心理学 (*Rassenpsychologie*) の研究成果を発表したものにすぎないと反論した<sup>15</sup>。さらにキルシュの批判に対しても、ユダヤ人の心理は

<sup>12</sup> Aniela Jaffé, *Aus Leben und Werkstatt von C. G. Jung*, Zürich, 1968.

<sup>13</sup> James Kirsch, “Die Judenfrage in der Psychotherapie: Einige Bemerkungen zu einem Aufsatz von C. G. Jung” *Jüdische Rundschau* 43 (29 May), 1934, p. 11.

<sup>14</sup> Gustav Bally, “Deutschstämmige Therapie”, in *Neue Zürcher Zeitung* vom. 27, 1934.

<sup>15</sup> C. G. Jung, “Rejoinder to Dr. Bally” (“Zeitgenössisches”), *Neue Zürcher Zeitung* 437/443 (13/14 March, 1934); again in *CW X*, pp. 535-44.

移住地域の様々な文化を吸収する能力に優れていることを強調することがみずからの本意であり、そのユダヤ人の能力はパレスチナにおいて確かに発揮されていると認めた。そしてユングは、「精神療法の現状について」が反ユダヤ主義とナチズムを支持するものであるか否かという問題については、テルアビブに居住しているノイマンと対面し、議論して欲しいとキルシュに伝えた<sup>16</sup>。

既述のとおり、ノイマンはチューリヒで分析をうけていた期間に「精神療法の現状について」の原稿をトニー・ヴォルフから受け取り、ユングにその真意を確かめる書簡を送っていた。その1934年2-5月のユング宛書簡には、ユングから分析の訓練を受けている状況下において自らの師を問いただすことは望まないが、そのような個人的事情にかかわらず、反ユダヤ主義と国民社会主義に関する意見をユングから聞き出し、場合によってはその考えを改めさせなければならないと記してある<sup>17</sup>。そして、二千年前のインド思想に精通しているユングが身近であるはずのユダヤ人のハシディズムについては全くの無知であることはなぜなのかと問いかけ、シオニズムの創造性に理解を示さないことを誹り、ユングの論文が偏見に満ちていることを断じている。

さらに本書簡において、ノイマンはゲルマン的無意識 (*germanischen Unbewussten*) というユングの考えにも疑問を突き付けている<sup>18</sup>。ユングによれば、キリスト教が抑圧してきた自然や民族的始原に対する崇拝はヨーロッパ人の意識にとってのシャドーになっており、民族主義運動や国民社会主義が流行していることは、抑圧されてきたシャドーの暴走と捉えられる。そのため、それらシャドーの抑圧を解除して意識化することができれば、よりよい文化の創出につなげることができるという。それに対しノイマンは、ユングが国民社会主義の台頭に対して楽観的であることを咎め、ドイツ民族の潜在的可能性を疑うことはないが、国民社会主義下でのアーリア的文化の復興よりもパレスチナにおけるユダヤ復興運動の方が望ましいものに思えると主張した。

本書簡を交わしたのちにノイマンとユングはチューリヒにおいて対面し、ゲルマン的無意識や反ユダヤ主義に関する見解を話し合ったと考えられる。1934年8月12日付のユングのノイマン宛書簡では、ドイツ人にとってもユダヤ人にとっても、無意識的元型の意識化が必要であるという見解を共有していることを確認し合っている<sup>19</sup>。さらに、意識化の過程が

---

<sup>16</sup> 「精神療法の現状について」と反ユダヤ主義をめぐるユングとキルシュの議論については、*The Jung-Kirsch Letters, The Correspondence of C. G. Jung and James Kirsch*, Edited by Ann Conrad Lammers, Routledge, 2016, pp. 40-56 を参照。

<sup>17</sup> *C. G. Jung, Erich Neumann: Die Briefe*, 2015, ss. 70-76.

<sup>18</sup> *Ibid.*, s. 71.

<sup>19</sup> *Ibid.*, ss. 108-117.

ドイツにおいてはカトリック教会からのキリスト教の解放、ハウアーのドイツ信仰運動といったかたちであらわれており、ユダヤ人の場合ではブーバーの主導するハシディズム、シオニズムといったかたちであらわれていると記されている。ユングは無意識的元型とハシディズム、およびシオニズムの関連性について詳述していないが、本書簡からは無意識的元型の意識化が特定の個人を対象としたものではなく、「ドイツ人」「ユダヤ人」といった不特定多数の人間にとって必要な治療として言及されていることが見て取れる。

一方ノイマンはキルシュの批判に応じてユングのために弁ずる論評を、1934年6月15日に『ユダヤ展望 (Jüdische Rundschau)』の48号に掲載した<sup>20</sup>。それによれば、ユング派の心理学はユダヤ人の民族的源泉を把握するために不可欠であり、非合理的な領域を創造的なものに変えようと試みる点において、シオニズムと共通性を有するものであるという。すなわち非理性的領域（荒野）を意識化（開拓）する点において、シオニズムと分析心理学は共通しており、シャドーの意識化は民族の倫理的課題であると説いている。このようなノイマンの主張がシオニズムの植民政策に無自覚であることは指摘するまでもないが、その試みはユングの言説から「反ユダヤ主義」を取り除きながら、近代西欧への同化によって失われてしまった原初的なユダヤ性に接近するという民族的使命を分析心理学に帯させようとするものであったと考えられる。

### 3. 群集心理論からシャドーの意識化へ至るユングの言論

シャドーの意識化が群集や民族といった不特定多数の人間を対象とする「治療」として理論化されていった過程は、ユングが1930年代初頭に発表していた他の論考からもたどることができる。その過程については、先行の研究者たちがすでに整理しているが、それによればユングが戦後にシャドーとして概念化したものは、戦前戦中には無意識的群集心理、およびヴォーダンの元型と呼ばれており、群集心理の制御を目的としたものであったと考えられている<sup>21</sup>。以下では、群集心理をめぐるユングの言論がヴォーダンの元型およびシャドーの意識化として理論化され、不特定多数の人間を治療する手段となっていく過程を整理

<sup>20</sup> Erich Neumann, Letter to the *Jüdische Rundschau* regarding “Die Judenfrage in der Psychotherapie” *Jüdische Rundschau* 48 (15 June), p. 5.

<sup>21</sup> ユングの群集論については、Voldoymyr Odajnyk, 1976. Aniela Jaffé, *The Myth of Meaning in the Work of C. J. Jung*, Daimon Verlag, 1984. Ritske Rensma, “Nietzsche, Jung, and Modern Militancy”, in *Understanding Nietzsche, Understanding Modernism*, Edited by Brian Pines and Douglas Burnham, Bloomsbury Academic, 2019, pp. 208-220. 上山安敏『フロイトとユング 精神分析運動とヨーロッパ知識社会』岩波書店、2014年。J. W. ハイジック「ユング心理学と公的自己」『研究所報』南山宗教文化研究所、第9号、1999年、25-44頁。リチャード・ノル『ユング・カルト』などを参照。

し、エラノス創設の歴史的コンテクストの解明へと繋げたい。

(1) 戦間期におけるユングの群集心理論

ユングは1933年2月にケルンとエッセンにおいて、ナチズム下の群集心理をテーマとする講演を行っていた。それによれば、自我が無意識的エネルギーに飲み込まれた状態は人格の後退した精神病の症状に等しく、複数の人間が同時にそのような状態に陥れば秩序破壊的な群集心理の暴走が生じるという。

私たちがこれまで、ひとえに個人主義的な傾向を貫いてきた結果、いまやその補償として集合的人間への退行が始まっています。それが威を振るっているのが、今日見られる集団の圧力です。だからいま、だれにも押し止めることができない雪崩に襲われたような、ある種の破局の雰囲気世を覆っているのも不思議ではありません。集団的人間が個人を窒息させようとしています、人間の営為に最後のところで責任を負うのはその個々の人間しかいないのです。集団そのものは常に無名で責任を負うにたりません<sup>22</sup>。

さらにユングは、複数の人間が寄り集まり「モップ (mob)」となることで、群集的人間の力学が働き出すと述べ、それについて以下のように説明している。

集合的な力の浸透によって起こる性格の変化には、予想を絶するものがあります。穏和で理性的な人が、狂乱し野獣と化す。これはつねに外部の環境のせいになってしまいますが、われわれのうちにあらかじめなかったものは、爆発のしようもないでしょう。実際、われわれは常住火口の上に坐しているようなもので、われわれの知る限り、このいったん爆発すればだれもかれも呑みつくすその噴火を、防ぐ手段は人間にはありません。理性だの健全な良識だのを説くことも結構ですが、その説かんとする当の相手が、精神病患者や憑かれた群集だったらどうするのか。このふたつの中に大した違いはありません。狂人もモップも、非個人的でおのれを超えた力に動かされているのです<sup>23</sup>。

ユングはこのようなモップの暴走を制御するためには無意識的エネルギーを意識化する治療が必要であり、分析心理学こそがその役割を担い得ると主張した。このユングの主張からは、すでに治療の対象が個人でなく、集合的な力の浸透によって異常な心理状態に置かれ

---

<sup>22</sup> ユング『現在と未来』松代洋一編訳、平凡社、2007（1996）年、89-90頁。

<sup>23</sup> 同書、92頁。

た群集（モップ）へと移行していたと考えられる<sup>24</sup>。

次第にユングは、群集（モップ）の心理に秩序破壊的な性質を付与する要因をヴォータンの元型と表現するようになっていった。1936年に刊行した論文「ヴォータン（“Wotan”）」では、ドイツ人の精神に集団的な混乱と無秩序、破壊衝動を生じさせている心の原因がヴォータンの元型であると説明している。ヴォータンの元型とは、キリスト教の抑圧してきた無意識的エネルギーが補償的にあらわれたものであり、キリスト教的価値体系を破壊し、そこに欠けていた新たな価値を創造しようとする機能を有するという。ユングは「ヴォータンこそドイツの魂の基本的特性であり、非合理的な心の「要素」である」<sup>25</sup>と述べた上で、さらに以下のように説明している。

ヴォータンの性格をもっと正確につかもうとすれば、彼が歴史上の精神的、政治的混乱や革命のなかで、いかなる働きをしてきたかを知るだけでは不十分である。〔中略〕。そこでこの「ヴォータン」を一つの元型と考えてもさしつかえない。それは自律的な心的要因として集団全体に効果を及ぼし、それによっておのれ独自の性情をあざやかに浮かび上がらせる。ヴォータンは独自の生物学的原理に従っていて、個々の人間存在とは別物である。個々の人間は折にふれ、この無意識的制約の影響に抵抗もならず縛られるばかりなのだ<sup>26</sup>。

ユングによれば、ヴォータンの元型は政治的混乱や革命を引き起こす心的要因であるが、その無意識的補償的エネルギーを意識化できれば破壊の後の創造へつなぐことができる。したがってナチズム下において多くの人々がとらわれている破壊衝動を意識化し、創造的なエネルギーに変えるための治療が必要であるという。このことは、ゲルマン的無意識を意識化し、創造性を生み出すことこそが民族的課題であるという、ノイマン宛書簡において示されていた主張と符合する。

ユングは、ヴォータンの元型がドイツの民族主義宗教運動というかたちで猛威を振るうことになる予見していた代表的人物にニーチェの名前を挙げている。そして、プフォルタ学院で学んでいた当時15歳のニーチェが森の中でヴォータンの元型に遭遇したという逸話

<sup>24</sup> ユングは群集を病理として捉える主張を、ル・ボン『群集心理』を踏まえながら展開している。「こうした人間が寄り集まると——群集にあってはつねにそうなのだが——異常な現象が持ち上がるのだ。ル・ボンの『群集心理学』を読めば、私の言うところは分かるはずである。群集の一部としての人間は、心理的に異常なのだ」（同書、106頁）。

<sup>25</sup> 同書、28頁

<sup>26</sup> 同書、30-31頁

を、エリーザベト・フォルスター＝ニーチェ『ニーチェの生涯 (Das Leben Friedrich Nietzsches)』を参考にしながら紹介している<sup>27</sup>。ユングがヴォータンの元型という言葉をはじめて使用したのは1936年2月5日に開催されたニーチェ『ツァラトゥストラ』に関するセミナーであった<sup>28</sup>。そのセミナーにおいてユングは、トラキアのオルギア的熱狂の神ディオニューソス、ヴォータンが中央ヨーロッパにあらわれ、ヴォータンの嵐がイタリアのファシズムとなり、ドイツでも吹き荒れていると語り、エックハルトやゲーテをはじめとするゲルマン的伝統に基づく国家の宗教的復興を目指してヴィルヘルム・ハウアーが主導していたドイツ信仰運動はそのあらわれであると訴えている<sup>29</sup>。ここからは、ヴォータンにとりつかれた群集心理の意識化を進めることが、ファシズムをより創造的なエネルギーに変えることを可能にするというユングの主張が読み取れる。ファシズムを批判するのではなく、そのうちから創造的なものを生み出そうとしたユングの姿勢は、既述のように、ヤッフェによれば国民社会主義の暴力性に対する認識が甘いものであり、バリーによればヒトラーに迎合したものとして激しく批判されるようになっていった。

#### (2) エラノス会議におけるシャドーの意識化とマンダラをめぐる議論

戦後、ユングは意識から排除された心的要因をヴォータンの元型でなく、シャドー（影）と呼ぶことが多くなっていった。終戦直後の1946年に刊行した論文「影との戦い（“The Fight with the Shadow”）」では、ナチズムが流行し、ヒトラーが大衆を先導し得たのは、数多くのドイツ人がシャドーを意識化するすべを知らず、無意識的エネルギーの暴走を防げなかったからであると述べている。したがって分析心理学には、ナチズムの再来を招かないためにも「影のもつ圧倒的な力と衝動に対する戦い」を遂行する使命があるという。

すでに1918年に、私はドイツ人の患者の無意識のなかに、彼らの個人的心理には帰することのできない独特の障壁があるのに気づいていました。こうした非個人的現象はつねに夢における神話的なモチーフとして現われるもので、そのモチーフは世界中の伝説や民話にも見られるようなものなのです。私はこうした神話的モチーフを元型と名付けました。[中略]。私が[戦時中のドイツで]観察したいくつかの元型は、原始性や暴力、残酷さを表していました。[中略]。当時発表した論文の中で、私は“金髪の野獣”が安らかな眠りから揺り起こされようとしている、爆発もありえなくはない

<sup>27</sup> 同書、29頁。

<sup>28</sup> Ritske Rensma, 2019, pp. 208-220.

<sup>29</sup> Jung's Seminar on Nietzsche's Zaratustra, p. 196.

と示唆しました<sup>30</sup>。

第1次世界大戦ののちに起こった無意識における高潮は、個人の夢の中にも反映され、野蛮や暴力、残忍さ……要するにあらゆる闇の諸勢力を表わす集合的、神話的な象徴として現われていました。こうした象徴が多数の個人のうちに出現し、しかもその意味が理解されないとき、それはまるで磁力でもあるかのようにこれら個人を吸い寄せて、ここに群集が出来上がるのです<sup>31</sup>。

さらにユングは、このような無意識の補償的エネルギーを意識化し、シャドーを統合することに成功した場合には「マンダラ」のイメージがあらわれることがあり、戦時中にも少数であるがそのような症例が確認されたことを報告している。ユングはマンダラのあらわれを「希望の光」と表現し、シャドーの意識化を進めてマンダラの症例を増やしていくべきであると訴える<sup>32</sup>。

意識から排除されたシャドーの統合、およびその成就としてあらわれるマンダラのイメージは、エラノス会議において盛んに取り上げられるテーマとなっていった。すでに戦前、エラノス会議の第1回会合において、ユングは患者の一人が個性化の過程をたどる際にマンダラのような一連の絵を描いたことを報告していた<sup>33</sup>。それによれば、マンダラは意識と無意識の調和、対立物の一致、結合の神秘をあらわすシンボルであり、意識化の過程においてしばしばその顕現が観察される。ニコラウス・クザヌスやペーメ、錬金術の思想においてもマンダラが描かれていることをユングは指摘し、それが集合的無意識を意識化する際に時代地域を超えてあらわれるものであるという。

このようなユングの意識化とマンダラをめぐる言論は、ノイマン、ジョセフ・キャンベル、ミルチャ・エリアーデ、井筒俊彦<sup>34</sup>といった他のエラノス講演者たちによって継承され、よりよい人格形成をめぐる倫理として提示されていった。例えばノイマンは、1948年に刊行した『深層心理学と新しい倫理』において、ナチズムの生じた歴史的原因を分析心理学の見地より分析した。それによれば、抑圧された心的領域はシャドーとなって外界の人物、事物に投影される。そしてシャドーを投影された人物はスケープゴートの役割を担うことにな

<sup>30</sup> ユング『現在と未来』116-117頁。

<sup>31</sup> 同書、118頁。

<sup>32</sup> 同書、119頁。

<sup>33</sup> C. G. Jung, “Zur Empirie des Individuationsprozesses”, *Eranos-Jahrbuch, Yoga und Meditation im Osten und im Westen*, 1933, Rhein-Verlag Zurich, 1934, ss. 201-214.

<sup>34</sup> 例えば、井筒俊彦「『易経』マンダラと儒教の形而上学」『東洋哲学の構造 エラノス会議講演集』澤井義次監訳、慶應義塾大学出版会、2019年、335-372頁などを参照。

り、群集がスケープゴートをめぐり暴走することにより、ファシズムや人種差別が生じる。そしてノイマンは、シャドーの意識化を進めていくと心の調和をあらわすマンダラのイメージがあらわれることがあり、それを促進することが分析心理学に課せられた新しい倫理であると説いている<sup>35</sup>。

ノイマンは本書を刊行した1948年にエラノス会議にはじめて参加し、「神秘的人間（“Der mystische Mensch”）」というタイトルの講演を行なった<sup>36</sup>。そこでは、意識から排除された心的領域に向き合うことは無意識的元型の発するヌミノーゼを体験することであり、ヌミノーゼのエネルギーを自我に統合し、自己に向けて拡大していくことの必要性を説いている。すなわち人類の歴史とは、自我と集合的無意識が混然となったウロボロスの段階から、無意識的太母に対する英雄的戦いを経て自己へ接近していく過程であり、ヌミノーゼのエネルギーを統合したことのイメージとしてマンダラがあらわれるという。さらにノイマンは、意識と無意識が過度に分離した状態は無意識的エネルギーの暴走を生じさせる危険性があると訴えており、翌1949年に刊行した『意識の起源史』においてもシャドーによって暴走する現代的「大衆（Mass）」の問題を、国民社会主義の暴力性に関する分析と重ね合わせながら論じている<sup>37</sup>。シャドーの意識化やマンダラといったユング派の概念は、エラノス会議においてヌミノーゼと結びつくことで、近代社会に生じた群集の病理を癒し、救済をもたらすための、宗教研究者の創造した新たな「宗教」となっていったと考えられる。

#### 4. 小括

これまでみてきたように、ユングは、ファシズムを拒絶したりそこから亡命したりするのではなく、すなわちファシズム的心理を抑圧しようとしたのではなく、ファシズム生成の原因であるとユングが考えたヴォータンの元型、およびインド・アーリア的な宗教性を意識領域＝現代キリスト教世界に統合することによって、「よりよく新しい宗教」につくりかえようとしていたと考えられる。エラノス会議も、当初はこのようなユングの信念を色濃く反映した場所であった可能性が想定される。ノイマンとの議論を経てシオニズムとも結びつきながら、西洋世界に同化したユダヤ教、およびキリスト教世界が抑圧してきた元型的無意識／シャドーを意識化することによって人格および宗教を刷新しようとする新たな宗教運動が展開されていった。ユングにとって戦後のエラノス会議とは、戦前のファシズム下でいだいた未解決の課題に継続して取り組むことのできる場所であり、ユングと同様に戦前の課

<sup>35</sup> E. ノイマン『深層心理学と新しい倫理』石渡隆司訳、人文書院、1987年、147頁。

<sup>36</sup> Erich Neumann, “Der mystische Mensch”, *Eranos-Jahrbuch*, 1948, ss. 317-374.

<sup>37</sup> E. ノイマン『意識の起源史』林道義訳、紀伊国屋書店、2006年、509-517頁。

題を持ち続けた人間たちが集い得た場所であったのではないか。

ファシズムが発生した歴史的コンテクストを検証する著作は戦後、大量に公刊され、ファシズムとの関係性を戦後においてどのように語るのかという問題はいまだ論争的なものである。シオニズムにおける民族復興や近代都市文明批判のように、ファシズムと同時期に、その渦中から生じながらも決定的な解決のないまま現代に至っている問題も少なくない。ユングはファシズムの発生した原因、およびその対処を心理的な治療と人格形成の問題として捉えたのであり、ナチズムの政党政治的な暴力性に対する危機感が希薄であったことは否めず、そのことに関する倫理性は問われて然るべきと考える。しかしながら「民族」「人種」「心理」「宗教」といった概念がファシズム期に帯びた意味がユングやエラノスを経由し、宗教学、宗教研究にどのように流れ込んだのか。戦前の宗教学と戦後の宗教学における連続性と断絶はどのように捉えられてきたのか、あるいは捉えていくべきであるのか。ユング的なファシズム論や民族心理論は宗教研究において刷新されたのか、あるいは刷新し得るもの、刷新してもよいものなのだろうか。このような問題群が今後の課題として浮上してくるが、戦前と戦後の接合点であったエラノスについて再考する必要性もこれらの問題を討議する過程において生じてくるだろう。上記の課題検討のための基盤として本稿を位置づけたい。